

白杵陽著

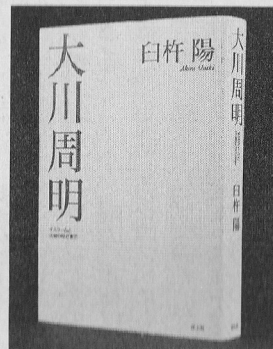
大川周明 イスラームと天皇のはざままで

評・片山 杜秀 (音楽評論家・日本思想史研究者)

大川周明には二つの顔がある。右翼革命による日本改造と「大東亜戦争」による世界新秩序建設を目指した、政治思想家・革命家。イスラームの聖典『コーラン』を荘嚴な擬古

「神人合一」を夢見て

でアジアはひとつと大川は考えた。精神文明として高い。しかし現実は何？ 神人一体の文明は神と人を峻別する文明に屈従を強いられている。許せない！ 大川は政治に転ずる。神人合一する精神的理想には、宗教(聖)と政治(俗)の合一する社会的理想が対応せねばなるまい。たとえば日本を天皇親政にし、



青土社
2400円

文で全訳した、宗教思想家・哲学者。両者の関係は？ 従来は混合され

がち。たとえば評論家 竹内好は「イスラームによる世界征服というヴィジョンが大川にはある」と述べた。世界戦争を叫ぶ大川と戦鬪的宗教イスラームに惹かれる大川に矛盾なしというわけだ。

が、著者は竹内を疑う。若き大川は純粋な宗教学の徒。キリスト教は神と人を峻別する。一方、儒教の最高道徳や仏教の仏性は人の心の内にある。イスラームも特にシーア派は人の心中での神との合一を重視する。神人一体なのだ。

その意味で日本からイスラームま

政教一致のイスラームや儒教の中国と組み、政教分離の西洋を退治し、聖俗一致の新世界を実現すべきだ。けれど日本改造は失敗。イスラームも近代化を迫られ政教一致を捨てだす。日本は中国と争いつつ対米英戦へ。大川は政治に挫折し宗教に帰り、戦後に『コーラン』の訳を完成する。

ゆえに大川が「イスラームによる世界征服」を最後まで信じていたなんて嘘と著者は考える。「9・11」後のイスラーム対西洋の構図を大川が予言していたという意見にも乗らない。晩年の大川は政教分離を受け入れつつ、せめて内面で神人合一を夢見る線に退却していたのだ。

大川の挫折の深さを知れば知るほど、我々は宗教と政治を現代に結び付け直そうとするあらゆる言説を疑わざるをえなくなるだろう。

◇うすき・あきら 1956年生まれ。日本女子大学教授・中東地域研究。